

学習会「ケアのフォークロア

～暮らしの中からケアの基本原則と視点を学ぶ～」報告書

関西ブロック 岡村 ヒロ子

・日 時；2017年9月16日（土）13：30～16：45

【タイムテーブル】

講 演 13：30～15：15

質疑応答 15：15～15：45

グループディスカッション 16：00～16：45

・場 所；茨木市福祉文化会館 202号室

・参加者数；35名

・講 師；立教大学コミュニティ福祉学部教授・日本福祉文化学会評議員 結城 俊哉氏

【結城俊哉氏のプロフィール】

ノーマライゼーション論、障害者福祉論、ケア論を中心に、最近は障害者の「生活の質（QOL）をめぐる支援方法」としてエイブルアートやアウトサイダー・アート（＝アール・ブリュット）等の当事者の自己表現活動を研究している。主な単編著に『生活支援の障害者福祉学』（明石書店）、『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法を考える』（高菅出版）など。

・趣 旨；この学習会の目的は、日々、対人援助の現場（家庭・施設・支援機関）で働くケアの担い手がつどいながら、日々の暮らし（日常生活世界）の中に宿る「ケアの本質」について一緒に考える時間とする。さらに講義だけでなく、グループワークも取り入れながら参加者が相互に交流できる場とする。



【講演内容】

テーマ；「ケアという仕事」とは何か

～ケアの基本原則とケアの担い手が成長するために必要なこと～

●当事者とは誰か、その特徴とは

・「問題状況に閉じ込められて、自分ひとりの力では解決困難な状況に陥っている人」「解決に向けて取り組んでいる人」「閉じ込められている人」「生きづらさを感じている人」「健康・愛する人・仕事・パートナー等を喪失している人」＝「何らかの喪失体験により生活のしづらさ（＝生の困難）を解決・緩和・解消するニーズを抱えている人」←支援サービスが必要としている

●ニーズとは何か・・・欲求・要求・需要・必要

・「生きづらさ」（＝氷山の一角）、「主訴（顕在化しているニーズ）」の背景をなす「潜在化しているニーズ」が、支援ニーズが必要な生活問題を構造的に形成している・

●ニーズに応える援助支援の本質とは何か

・心の悪を描いた芥川龍之介著『蜘蛛の糸』を手がかりとして「ケアの本質・真意」を考える。援助は人を試してはいけないのではないだろうか。

●ケアの担い手（援助者）の役割

・生活（ライフ：Life）の困難を読み解く視点

・生活問題を構造的に理解する方法としての視点⇒ライフ(Life)＝生命活動×日常(暮らし)×人生(生涯)、ライフ(Life)＝ニーズの集合体、ライフの構成要素＝「衣・食・住・医・職・仲間（家族・コミュニティにおける人間関係）」＋時間的要素

●「誰のためのケアなのか」を考える前に

問1：クライアントとは誰？

・問題を抱えている人（第一の当事者）、当事者と関わることを余儀なくされた人（第二の当事者）

⇒本人よりも周りが問題化していることもある。相談者は相談できる健康な力（強さ）がある→思いを表現できる→その時点で、すでに問題の半分は解決しているのかも知れない。

問2：「ケア」を実践/展開する力とは？

・ケアの人材の育て方/育成方法とは？⇒市民を育てる＝福祉職のみで解決しようと考えない。

・ケアの担い手の成長を支援するとは？⇒魅力ある現場にする

●「ケア」の周辺の言葉

1. キュア 2. ヒーリング 3. マジック 4. トリートメント 5. セラピー 6. サポート

7. ヘルプ 8. アシスト 9. チャリティ 10. フィランソロピー 11. ナース 12. ジェネレイティビティ 13. ホスピタリティ 14. エイド 15. 養生

●方法としてのケアの意味とは何か

・専門職の「ケア」（相談援助/介護/介助/看護）の意味

・面談という共同作業＝目的のある専門的で非日常的な対話

⇒援助者は「クライアントは、本当は他者・他人に話したくないことを話さなければならない状況に置かれていること」を理解する。

●相談支援の方法（＝作法）

*ケアの担い手（対人援助者）が心しておくべき（礼儀）作法と心がけること

1. 対人援助という関係性の中には「毒気＝悪いストレス」がある。

2. 話の内容・その場の関わりが「事実/現実」であるとは限らない。「真実/真相」は「藪の中」にあるのかもしれない。

←芥川龍之介の小説

3. ケアをめぐる援助関係＝クライアントと一定の距離を常に保つ＝援助的な距離感覚「山あらしのジレンマ」、熱い<心（ハート）>とクールな<精神/頭脳（マインド）>

●ケアをめぐる関係性について

1) 「非対称性」であるケア（援助）；健康な援助者は相手からも学ぶ謙虚さをもつ。人間としては対等だが情報量・判断基準は教育を受けた専門職が多くもっている。

2) 「傲慢」な援助者による「不健康」なケアをめぐる援助関係＝クライアント（相手）を支配しコントロール（管理・拘

束)する。「無害で有能」な援助者であること。)

3) クライアントの自己決定権の侵害=主体性を剥奪してしまう「反ケア的な仕事」をする危険性を孕む援助者が多いかもしれない。(人の為=「偽り」かも知れない)

●私たちは、ケアという仕事を通して日々何をしているだろうか

・基本的に「無害」か、あまり害のない「よき触媒」であることを目指す⇒必要な時に登場、無理をせざるを得ないケアの仕事に就くものは、周囲の人々に知らない間に迷惑をかけているかもしれない。

●ケアの担い手にとって、専門職・専門性としての責務とは何か？

1. 援助関係の質を定める第一の責務は援助者にある⇒クライアントの最善の利益を考慮、社会的承認を獲得、面接・相談・支援・介護・介助の適切な条件設定

2. 専門的知識や情報を高めるための条件を整え、絶えず実行する⇒身銭を切って学び続けるという意識、読書力=表現力・思考力(1ヶ月に1冊は読んで欲しい)

3. 援助過程(プロセス)に私的な利害を侵入させない⇒公共的性格、「自己覚知/理解の重要性」=メシア(救世主)思想に要注意

4. 社会的に承認されている範囲を超えてクライアントの生活に侵入しない⇒「人権保障」「守秘義務」への慎重な判断力、「今の<自分の力の限界に常に自覚的であること>に責任」をもつ

●対人援助職(ケアの担い手)の病理

・「燃え尽き(バーンアウト)症候群」の3条件

1. 休めない。休んでも休んだ気がしない。 2. いくら頑張っても報われない。 3. 強すぎる仕事や相手への思い入れ(理想と現実とのギャップ)

・「共依存関係」=自立(自律)していない人間同士の「嗜癖的な対人関係」;必要な「山あらしのジレンマ」⇒解決方法;的確な立ち位置(支持的対応、指示的対応・アサーティブ対応)を取る

●ケアの仕事と気働き文化論

・「気働き文化の力」(中井久夫) ・「働き上手=休み上手」

・「疲れ」を感じるのは健康の証。「疲れ知らず」の人はいつかどこかで破綻するリスクを抱えている。「気晴らし」=「非日常の世界」

・日本における<「仕事文化」社会>では「気働き」ができることに価値が置かれる。一番難しいのは、「気疲れ」の解消。

●「気」の位置づけ

・対人援助の「ケアの仕事」は「気働き」が重視される。

・「気」にまつわる表現の数々:気が沈む・気が弾む・気は心等々

●ケアの担い手の健康指標

1. 「曖昧さ」に耐える 2. 「待つこと」ができる 3. 「休憩」を適宜(こまめ)とる 4. 「余力」を残す 5. 「課題の優先度と自己の限界」の見極める 6. 「人や問題の多様性」を受容する 7. 「自分の身体感覚」を大切にする

●健康な「ケアの担い手」であるために必要なこと

1. 身体的・精神的な健全さ 2. ケアの仕事が他者に希望をもたらす仕事であることへの自覚

3. 相手に対して「無害」である 4. 自分の「生き方/人生」を尊重 5. よき指導者(スーパーバイザー)・恩師・師匠(メンター)をもつと良い 6. ケアの担い手自身が「幸福」であることは<義務と責任>である。(不幸な援助者は、クライアントを支援にはできない。不健康な援助者は、クライアントを健康にできないと思う。)

●「手」の援助論について

・京都の三十三間堂の千手観音像:衆生(=生命あるものすべて)の「苦悩」に向けられた観音の「手」の意味について。

・ケアの仕事と「手」の援助論⇒「救済の手」=援助(ケア)のアイコンかも知れない。

・「ケアの担い手」の「手」が問いかけるもの=多くある「手」の付く言葉:手当て・手遅れ・手間ひま・手応え・手加減・手を打つ等々

●ケアの仕事で本当に大切なもの

「心で見なくちゃ、ものはよく見えない。大切なものは、目には見えないんだよ」

(小さな王子/星の王子さま)

* 出典『小さな王子』(サン・テグジュペリ著/野崎歓訳・光文社古典新訳文庫より)

●「ケアという仕事の本質」ケアの仕事の担い手を育成する基盤とは何か

・「医師が治せる患者は少ないが、看護できない患者はいない。」(中井久夫：精神科医の言葉)

・「ケアの仕事」は人間存在(Life)の基盤の上に成立している。＜生命の誕生＞(出産/子育て)から始まり＜死＞(看取り/ターミナルケア)まで続く「人間のミッション(使命)としての仕事」が「ケア」である。

・ケアの担い手が人と関わることは、人間が生きる「Life＝人間的営為(生命の尊厳・暮らし・人生)」に貢献する人権尊重・いのちの尊厳・希望・夢・未来への「灯火」であり、さらに、危うい今日的な社会状況の中において「平和の盾」となることが「ケアという仕事の本質」に他ならない。(結城論)

【グループディスカッション】

「テーマ」;「生老病死に必要なケアとは何か」

私達が援助という形で関わるクライアントの方々の人生はいわばその方の文化、アートといえる。どのような状態になっても私達はその方の生き方＝文化を尊重し、寄り添ったケアをすることが大切である。6グループすべての発表をまとめると結城氏の講演内容を反映したものであった。参加者の職業は福祉・医療・教育・地域活動家とたいへん幅広かったが、人の生き方に関わる姿勢では共通していたように思った。

* 参考文献

- ・結城俊哉『ケアのフォークロア 対人援助の基本原則と展開方法を考える』高菅出版 2013年
- ・窪田暁子『福祉援助の臨床：共感する他者として』誠信書房 2013年

* その他の参考図書・文献・図書案内

- ・中井久夫・山口直彦『(第2版) 看護のための精神医学』医学書院 2008年
- ・中井久夫『こんなとき私はどうしてきたか』医学書院 2007年

【所感】

「ケアのフォークロア」・・・参加者にとっては、なじみの薄い不思議なテーマをどのような切り口から展開なさるのか、とても楽しみだった。なんともゆったりとした雰囲気の中、結城さん。語りにくいテーマをお願いして、お気の毒と思いつつ、耳を傾けていると話の斬り込みの意外性に、いつの間にか引きつけられていた。芥川龍之介の短編小説「蜘蛛の糸」からケアの真意に迫るとは・・・。さらに絵画が表現しようとしたこと、観音像が意味することなどを惜しげなく引き合いに出して「ケアの本質」を静かに語った。その博学ぶりには目を見張った。まさにケアは「アート」なのだと思えて実感できるお話だった。

福祉に携わる人々の多くはケアを単に生活行為への介護・援助と狭く捉えてしまう。ケアを面白くなく、貧弱なものに仕立てているのはそこに大きな要因があるように思う。福祉職の養成に関わっているが、これまで「ケアの本質」をどう伝えてきたか、ぶれていなかったかを思い起こしてみた。

養成課程で最も抜け落ちていたことだとしたら教える立場にある者の責任は大きい。

「ケア」とは、結城さんが定義したように人間存在(Life)の基盤の上に成立し、「人間のミッション(使命)としての誇り高い仕事」である。たいへん魅力的で奥が深い。私達は、しばしば日々の繁忙・仕事への慣れ・モチベーションの低下から仕事の目標を見失いがちで「何のために仕事をしているのか」分からなくなることがある。話を伺いながら、時には踏みとどまって、自らの考え・仕事の意味について言葉にしながら整理していただくことが大切だと痛感した。

今回の学習会はたいへん好評で「結城旋風」を起こしている。参加者が求めていたテーマだったのかもしれない。再び学びの機会を作っていきたい。

